

外来語を含む専門語

福 島 秀 晃

〔キーワード〕 複合語 片仮名 ローマ字 漢字 語末形態

はじめに

近年ローマ字が日本語の中で使用されることが多くなってきている。その大半は「WC」や「IOC」などの略語である。だが、複合語を構成する形態素としてローマ字が含まれる次のような例も散見されるようになってきている。

富士通はまだ最新版の互換 OSを発表していない。(日本経済新聞、1990年7月5日、朝刊)
注①

本稿ではこのようなローマ字表記形態素(以下「ローマ字」をこの意味で使う)が含まれる語、すなわちローマ字を含む複合語について、新聞での実際の使用例の調査をもとに、次の3点から考察し、その特徴を明らかにしたいと思う。

- 一 傾向としての専門語の多用
- 二 片仮名から見た特徴
- 三 漢字から見た特徴

資料としては、1990年7月1日から31日までの1か月の朝日新聞(以下朝日と略記)と日本経済新聞(以下日経と略記)を使用した。調査したのは両紙の第一面と社会面(最後から2ページ目と3ページ目)、そして日経の産業面(2ページ以上にわたる日はその日の産業面の1ページ目)である。第一面と社会面は掲載される記事の分野が多岐にわたる点から、また、産業面は多くの実例がえられると予想できることから調査対象に選んだ。

一 傾向としての専門語の多用

ローマ字の略語については、すでに専門語の多さが指摘されており、ローマ字を含む複合語についてもそのことは容易に推察できる。
注②

ここでは最初に調査の全容からみた特徴を述べ、次いでその特徴を「コンピューター・エレクトロニクス・情報通信用語」と産業面、「国際関係用語」と第一面、「経済用語」と日経という順番で整理していく。そして、その中でローマ字を含む複合語の専門語の多さを確認するとともに、専門語にしばってその性格を考察したいと思う。

今回調査した朝日の第一面と社会面、日経の第一面と社会面と産業面に出てきたローマ字を含む複合語の異なり語数は483語であった。これを両紙の紙面別に整理したのが次の表Iである。この表の第一面と産業面は1ページ当りの数である。これに対して社会面は

2ページ当りの数であるので、1ページ当りに換算した数を（ ）内に示してある。

この表の中で最も目をひくのが、日経の産業面の263という数字である。産業面に出ている語の詳細は後述するが、産業に関係する語が非常に多いことは、この数字からだけでも明らかである。次に一般的な使用頻度という点から注目しておきたいものとして、朝日と日経両紙の第一面と社会面の数字がある。この数字から1日当りのローマ字を含む複合語の異なり語数を求めたのが表Ⅱである。この表の日経で4.5語、朝日で3.0語という第一面と社会面を合わせた頻度について、その多寡を論じることには意味はない。だが新聞の中で最も一般性のある紙面で、毎日1語以上使われているということから、ローマ字を含む複合語が特異なものでなくなってきたということができる。

以上、紙面別の数字から概要をみてきた。

これに対して、どのような分野の語が多いかを整理したのが次の表Ⅲである。この表からも分かるように、ローマ字を含む複合語の使用される分野は多岐にわたるが、その語数には大きな片寄りがある。特に数の多い分野としては、コンピューター・国際関係・エレクトロニクス・情報通信があり、次いで多いものに経済がある。この5分野の異なり語数の合計は271で、これは全体の6割弱である。またここにあげた五つの分野のうち、コンピューター・エレクトロニクス・情報通信の三つの分野の語は産業面に、国際関係の分野の語は第一面にそのほとんどが出ているという

新聞 紙面	日 経	朝 日	日経+朝日
第一面	66	39	98
社会面	79 (40)	66 (33)	136 (68)
産業面	263		
第一面+社会面	142	105	228
合 計	388	105	483

表Ⅰ ローマ字を含む複合語の異なり語数

新聞 紙面	日 経	朝 日
第一面	2.2	1.3
社会面	2.5	2.2
第一面+社会面	4.5	3.0

表Ⅱ 1日当りのローマ字を含む複合語の異なり語数

分 野	語数	分 野	語数
コンピューター	76	航空・宇宙	12
国際関係	56	行政	9
エレクトロニクス	55	化学	9
情報通信	49	バイオテクノロジー	9
経済	35	自動車	8
		資源	6
鉄 道	27	船 舶	5
放送・出版・報道	23	医学・薬学	5
政 治	21	原 子 力	4
教 育	20	軍 事	4
社 会	19	ファッション	2
娯楽・スポーツ	14	そ の 他	24

表Ⅲ 分野別の異なり語数

特徴がある。以下、コンピューター・エレクトロニクス・情報通信用語、国際関係用語、経済用語の順で整理していくことにする。

産業界でのローマ字を含む複合語の多さ、特にコンピューター・エレクトロニクス・情報通信の分野での多さは、新聞の中で使用されるローマ字を含む複合語の専門語としての多さを物語るといえる。この分野の語の多くは、次の例のように、同じローマ字を含む場合が多く、またそのローマ字は専門的な概念を表すものが多い。

ア ダイナミックRAM (DRAM, Dynamic Random Access Memory) 「記憶保持動作が必要な随時書き込み読み出し可能な記憶素子」

イ ビデオRAM (VRAM, Video RAM) 「画像処理専用の随時書き込み読み出しメモリー」

ウ 大型カラーLCD (Liquid Crystal color Display) 「大型カラー液晶表示装置」

エ LCD市場 「LCD+市場」

オ LAN技術 (Local Area Network) 「構内情報通信網の技術」

カ 光ファイバーLAN 「光ファイバーを利用した構内情報通信網」

またこの分野以外の語であっても、説明がなければ意味の分からない非日常的な語が、産業界には数多くあった。次の表Ⅳは産業界に出てきた語の分野別の数とその語例である。^{注①}この表の分類は先の表Ⅲよりもくわしくなっている。

分 野	語数	実 例	分 野	語数	実 例
コンピューター	72	AX協議会	自 助 車	3	EDSジャパン
エレクトロニクス	55	薄膜EL	放 送	3	HDTV用
情 報 通 信	41	国際証券決済 VANサービス	原 子 力	2	BWRメーカー
経 済	21	BOT方式	軍 事	2	P7A開発
国 際 関 係	18	APEC参加問題	バイオテクノロジー	2	バイオ血栓溶融剤 TPA
政 治	3	BATAN主導	音 楽	2	米CBSレコード
石 油	6	C重油	教 育	2	MIT研究員
船 舶	5	VLCCビジネス	医 学	2	DDS製造ライン
化 学	3	PPSメーカー	そ の 他	20	JR系

表Ⅳ 産業界に出ていた語の分野別異なり語数と実例

ここに上がった分野を見てみると、日常的で身近なものは自動車・放送・音楽・教育の四つぐらいで、その他はどちらかといえば身近とはいえない分野ばかりである。しかもその身近な四つの分野も、実例をみるとこの表にあげたような専門的で、なじみの薄い語ばかりであった。このことから傾向としての専門語の多さ、幅広さを窺うことができる。

ところで、産業界に掲載される記事には、新しさや産業界における価値が求められる。そのため、新技術の実用化や技術革新そのものがニュースとしての重要性を持つことにもなる。したがって、そこで使用される用語もこの表の例の多くがそうであるように、新しい技術や概念に対応する専門語が多くなっていく。このこととローマ字を含む複合語の使用

される分野の非日常性からくる専門性ということを含わせて考えると、産業面でのローマ字を含む複合語の多さは、ローマ字を含む複合語の専門語の多さを裏打ちしているといえることができる。

次に国際関係の用語について見ていくことにする。この語の特徴は、その7割強が第一面に出ている点である。この分野の56語のうち40語が第一面に出ている。次の〔資料1〕は、その40語の中に含まれていたローマ字である。

〔資料1〕 () 内の数字は、そのローマ字を含む語の朝日と日経を通しての第一面での異なり語数。「 」内は実例。

NATO(22) 「NATO加盟」/EC(8) 「EC統合」/ASEAN(3) 「ASEAN諸国」/OECD(2) 「OECD租税委員会」/CSCE(以下すべて1) 「CSCEタイプ」/OPEC「OPEC各国」/TNC「TNC代表筋」^{注⑤}/WTO「WTO加盟国」/CFE「CFE調印後」^{注⑥}

この資料のローマ字は、最後にあげた「CFE」を除くと、すべて国際機関のローマ字略語である。したがって40語のうち39語が、国際機関のローマ字略語を含む複合語ということになる。

今回の調査は、統一ドイツのNATO加盟にまつわる変動のあった時期と重なったために、「NATO」を含む語が非常に多かった。この一時的な影響を除くために、先にあげた表1の数字から「NATO」を含む語の数を差し引いて考えると、第一面に出ているローマ字を含む複合語のうち、そのローマ字が国際機関の略語である語は2割強になる。また「NATO」を含む語も合わせて計算すると4割になる。

第一面は新聞の顔といえる紙面であり、人目にもふれやすい。その第一面で国際機関の略語を含む語が多いことは、この種の語が人の目につく機会が多いということである。また我々が目にしやすいローマ字を含む複合語の類型として、「ローマ字の国際機関+漢字」というかたちを想定することができる。

次に経済に分類した語について述べることにする。

本稿では、「EC委」や「OPEC原油」のような、ローマ字が国際機関の略語であるような語を経済に分類せず、一括して国際関係の用語として扱った。これは「EC内」のように分野の判断がむずかしい語があったためである。

そこで、この分野の語の第一の特徴は、全部で35語のうち34語が日経に出ている点である。朝日に出ているのは、第一面の「ODA費」だけである。日経の第一面の12語と比較しても非常に少ない。この原因としては国際機関に関する語を経済に入れていないことが考えられる。だがそれよりも、経済紙と一般紙の差、つまり記事の内容の差と使用される用語の差が、より大きな要因となっていると考えられる。次の〔資料2〕は日経の第一面に出ている経済用語のローマ字を含む複合語である。

〔資料2〕

AMS方式^{注⑦}/CD金利^{注⑧}/FF金利^{注⑨}/GNPデフレター^{注⑩}/JCBカード/小口MMC^{注⑪}/
新型MMC^{注⑫}/中口MMC^{注⑬}/大型M&A^{注⑭}/ODA減少^{注⑮}/TB貸し出し^{注⑯}/TB利回り^{注⑰}

この中には「小口MMC」のようによく目にする語もあるが、多くは専門用語である。また、ローマ字には「TB」や「M&A」など一般的な認知の度が低いと思われる語が多い。これに対して、ローマ字以外の形態素は「デフレーター」を除くと、意味の分かりやすいものばかりである。

以上に考察してきたことを次にまとめる。

- 1 ローマ字を含む複合語には専門語が多い。
- 2 産業の最先端、特にコンピューター・エレクトロニクス・情報通信の分野に多い。
- 3 先端技術や新しい概念はローマ字によって表されることが多い。
- 4 一般に目にふれやすい類型として「国際機関のローマ字略語+漢字」が考えられる。

二 片仮名から見た特徴

今回の調査で、片仮名書きのローマ字を含む複合語は、表Ⅴに示した通り、異なり語数で156語あった。次はその例である。

片仮名を含む語	156
片仮名の形態素	95

表Ⅴ 片仮名の異なり語数

キ ICカード (Integrated Circuit Card)「集積回路を組み込んで情報容量を大きくしたカード」

ク Iターン 「都会での仕事をやめて故郷以外の地方に就職すること」

ケ Uターン 「都会での仕事をやめて故郷で就職すること」

この156語のうち、クとケのように片仮名が同じ場合をすべて1と数えて、片仮名による形態素(以下「片仮名」をこの意味で使う)の異なり数を求めると95種類になった。ここではまずその95種類を、曖昧さが残るが「一般に通用し意味が分かるか」という規準で分類することによって、片仮名の特徴を推測する。次いで分類した語をさらに細かく整理していくなかで、推測した特徴を詳しく考察していくことにする。

次は上記の規準による分類の結果である。

【分類1】

- ① 外国語に由来する語で、一般に通用し意味が容易に推察できるもの……71
- ② 外国語に由来する語であるが、一般に通用するとはいえず、意味が容易に推察できないもの……18
- ③ 日本語に由来するものと、①又は②に分類するには曖昧さの残るもの……6

この分類の①～③(以下①②③をこの【分類1】での①②③の意味で使う)の例を示したのが次の【資料3】である。①については71種類中5種類だけを、②と③についてはすべてをあげた。

【資料3】 数字は、例にあげた語の中に含まれる片仮名を構成要素として含む語の数。「A紙ライセンス 2」とは、「ライセンス」を含む語が他にもう1語あり、異なり語数が2であることを示す。

- ① FMRシリーズ 9/A級ライセンス 2/OEMメーカー 2/Tシャツ 1/
NTTルート 1
- ② NPA中部ネグロス地区委員会 2/Uバーン 2/ATVコンソーシアム 1
(以下すべて1)/IC用ステッパー/16Kグロブリン/LSIチップ/GNPデフレ
ター/IDOハンディフォンミニモ/JCGドルチェエンジニアリング/LCD生産会
社オプトレックス/NECセミコンダクターズ/PTバクリー化成/SGウォーバー
グ/IBCビークルズ/アキレスUSA/Wウィルヘルムセン/サン製WS/ダイナ
ミックRAM
- ③ スーパーバードB 2/CBSソニー 2/メルセデスベンツ1500SL 1(以下すべ
て1)/UNIXインターナショナル/USエア/コークニUSA

この分類によると全部で95種類の片仮名のうち、4分の3弱に当たる71種類が、①の「外国語に由来する語で、一般に通用し意味が容易に推察できるもの」になった。このことから、ローマ字を含む複合語に含まれる片仮名の特徴として、その大半は一般に通用する外来語であることがあげられよう。

以下、その特徴について実際の例から考察してみたいと思う。

①について次の2語を例として考えてみる。

コ OEMメーカー (Original Equipment Manufacturing)「相手先ブランドにより生産を行う会社」

サ FMRシリーズ「富士通のコンピューターの名称」

この2語は専門語といえる語であろう。しかし、各々の語の中に含まれる片仮名、「メーカー」と「シリーズ」は専門的な語ではなく、日本語に定着した一般的な外来語である。先述の通りローマ字を含む複合語には専門語が多い。しかし、語としては専門的であっても、その中に含まれる片仮名だけを見れば、この例のように一般的な外来語が多いのである。

次に②と③について見てみることにする。次の【分類2】は、②と③の24語についてその片仮名がどのようなものであるのかを調べて、固有名詞的なものから普通名詞的なものへと整理したものである。

【分類2】 ②③は【分類1】の番号による。

- | | | |
|-----|---|-----|
| ②ーア | 団体名又はその一部分 | 10語 |
| | PTバクリー化成/SGウォーバーグ/JCGドルチェエンジニアリング/LCD生産会社オプトレックス/NECセミコンダクターズ/IBCビークルズ/アキレスUSA/Wウィルヘルムセン/サン製WS/ATVコンソーシアム | |
| ②ーイ | 地名 | 1語 |
| | NPA中部ネグロス地区委員会 | |
| ②ーウ | 物品の名称 | 1語 |
| | IDOハンディフォンミニモ | |
| ②ーエ | 専門語 | 5語 |

IC用ステッパー／GNPデフレーター／16Kグロブリン／LSIチップ／十六メガビットダイナミックRAM	
②一オ 一般的な用語	
Uバーン	1語
③一ア 団体名又はその一部分	4語
UNIXインターナショナル／USエア／CBSソニー／コークニUSA	
③一ウ 物品の名称	2語
スーパーバード B／メルセデツベンツ1500SL	
③一イ・エ・オは該当する語なし	

②と③を通じて最も多いのが、アの社名や機関名などの団体の名称であった。その数は②と③に分類したものの、6割弱の14語にのぼっている。そのうち②の外国の社名や機関名は、次の例に示したように、

ATV Consortium → ATVコンソーシアム

日本語化する際に、外国語で省略されているローマ字はそのままの形で取り入れ、それ以外の部分は原音に近い片仮名で表記するのが普通である。「J Bush」を「J ブッシュ」とするのと同じで、恣意的に形を変えられることはない。③一アの4語も団体の名称ということには変りがない。ただ「ソニー」のように日本語に由来するものや、一般的かどうか判断に困るものがあるので、③という分類を設けた。

次の②一イの「NPA中部ネグロス地区委員会」の「ネグロス」は、フィリピンの地名である。これも原音に近い形で片仮名表記されるのが普通である。

③一ウと③一ウの3語は次に示した通り製品の名称や愛称である。

シ ^イIDOハンディフォンミニモ 「日本移動通信の携帯用電話」

ス スーパーバード B 「宇宙通信社の通信衛星二号機」

セ メルセデスベンツ1500SL 「西独ベンツ社的高级乗用車」

以上、②一ア、イ、ウと③一ア、ウについて個々に見てきたが、これらは全体としてみると固有名詞的なものといえる。そしてそのことが、ア一ウに分類した片仮名を一般的なものになりにくくしているのである。

次に②一エに分類した専門語について見ていく。ローマ字を含む複合語に専門語が多いことは先に述べた通りである。しかし、その中に含まれる片仮名が専門的で一般になじみのうすい語であるものは少なく、②一エにあげた5語だけであった。なお②一オに分類した「Uバーン」はドイツの地下鉄の呼称である。見慣れない語であるが、もとは日常的な場面で使用される語なので、一般的なものとした。

以上、片仮名による形態素について見てきた。その特徴を整理すると次のようになる。

- 1 ローマ字を含む複合語の中の片仮名による形態素は、専門語が少なく、一般的な外来語が多い。また、専門的な概念はローマ字に負うことが多い。
- 2 一般的でない片仮名による形態素の多くは、固有名詞又はその一部分である。

三 漢字から見た特徴

次にローマ字を含む複合語を構成する漢字の形態素（以下「漢字」をこの意味で使う）の中で、使用頻度が6以上のものを取り上げ、これを次のように分類して、語構成上の特徴を考察してみたい。

〔分類3〕

- | | | |
|---|---|------------------|
| { | ① | ローマ字+「型」……………7語 |
| | ② | ローマ字+「方式」……………6語 |
| | ③ | ローマ字+「社」……………12語 |
| | ④ | ローマ字+「側」……………7語 |
| | ⑤ | ローマ字+「用」……………7語 |

以下この順に従って記述する。

① ローマ字+「型」

今回の調査ではこの「型」のつく語は7例みつかった。次のソからツはその実際の例である。

- ソ PWR型原発（Pressurized Water Reactor）「加圧水型軽水炉」
- タ B型肝炎ウイルス（hBv, Hepatitis B Virus）
- チ B747型 「ボーイング747型機」
- ツ H型钢 「Hの形状の鋼材」

例のソのローマ字「PWR」は加圧水型の原子炉のことで、「PWR」だけでも通用する略語である。「型」を意味する語は省略される側のもとの英語には含まれていない。したがって漢字「型」は、日本語に取り入れられて「PWR型原発」という語になる際につけられたと考えられる。タの「B型肝炎ウイルス」の「型」もこれと同じである。前にあるローマ字に略語と記号という違いはあるが、原語に「型」にあたる形態素がない点は同じである。チの「B747型」も記号に「型」をつけて日本語化したものであり、数字が含まれているが語構成上は「B型肝炎ウイルス」と同じである。またこの用法の「型」には方式や種類という意味合いがある。これに対してソの「H型钢」の「H」は「丁字型」の「丁」と一緒に形状を表すものであり、漢字の「型」は「H」をうけて「～のかたち」という意味で使われている。例にはあげなかったが残りの3語もソからチの「型」と同じ語構成であったので、この「H型钢」の「型」だけが、外国語を日本語に取り入れる際に用いられる「型」ではなかったということになる。

② ローマ字+「方式」

- テ BOT方式（Build Operation Transfer）「請け負い企業が建設、運営して、軌道に乗せてから引き渡す経済協力の方法」
- ト PWR方式 「加圧水型軽水炉」

「方式」の前にくるローマ字はすべて例に示したような略語であった。この点が「型」と違うだけで、前に略語をもつ場合の「型」と語構成上の相違はなかった。

③ ローマ字+「社」

ナ IBM社 (International Business Machines Corporation)

ニ SPT社 (Signal Processing Technology)

この「ローマ字+社」が、「ローマ字+漢字」というパターンの中では最も多かった。「社」の前にくるローマ字はすべて頭文字による省略によって作られたものであった。この形のローマ字にはツの「IBM」のように、一般に認知されていて略語として通用するものと、ニの「SPT」のように略語として定着していないものがある。しかしこの違いは会社の知名度に起因するものであって、どちらも頭文字による略称である点に変わりない。また、漢字の「社」については「company」や「corporation」を漢語に訳したものと見方もできる。しかし、「IBM」がそれだけで社名を表す語として通用することや、英語の略語辞典の記述に「company」や「corporation」がない場合があることから、「社」は日本語化する際に使われる形態素と考えた方がよい。

漢字の社名を記述する際には次の記事のように、社名だけを記述するのが一般的である。

英大手コンピューターメーカー ICL社を買収した富士通は、……(日経、1990年7月4日、朝刊、下線は筆者)

これに対してローマ字の社名の場合には、社名を表すローマ字に、会社であることを表す「社」をつけることによって、会社ということを示している。

④ ローマ字+「側」

ヌ NATO側 (North Atlantic Treaty Organization)

ネ TBS側 「東京放送の略称」

漢字「側」の前にあるローマ字は、ヌの「NATO」のような組織の略称か、ネの「TBS」のような会社の略称であった。いずれも団体の略称と考えられるので、「側」の前にくるローマ字は団体を表す略称ということになる。また、語数は3語と少なかったが、「側」と同じく前にくるローマ字が団体の略称であるものとして、「内」があったのでその例もあげておく。

ノ OPEC内 (Organization of Petroleum Exporting Countries)

⑤ ローマ字+「用」

ハ HDD用 (Hard disk Drive)

ヒ 1M用 (1 mega bit Dynamic Random Access Memory) 「記憶保持動作が必要な随時書き込み読み出し可能な記憶素子」

「用」を構成要素として語末に含む語、7語のうち6語のローマ字が、ハのような略語であった。略語といえないのは、ヒの「1M」だけである。「1M」は「1メガビット DRAM」をさらに省略した形で、符丁といえる省略形である。だが省略によって生じたローマ字形態素に、もとの語の意味が託されているという点は略語と同じであり、略語に準じる形態素といえる。したがって「1M」を例外と考える必要はなく、「用」の前には略語がくるということができる。

以上、「ローマ字+漢字」という形の複合語をつくる、特徴的な5種の漢字を見てき

た。その特徴を整理すると次のようになる。

- 1 どの漢字もすべて、ローマ字の直後にあり、語構成は前が後を修飾するという日本語の構成法に従っている。
- 2 「方式」を除く他の四つは一文字であり、その文字だけで使用されることの少ない非独立的な形態素である。
- 3 「型」を除く四つの漢字は、前にくるローマ字が略語又はこれに準ずる形態素であり、ローマ字が一語の主たる意味を担っている。

ここに上げた以外にも頻度3以上で、1と2を満たすものに「判」と「級」が、1から3を満たすものに「内」があった。この語末にくる漢字は、複合語の一部分にローマ字を取り入れる際の一つの類型をなしているといえるものである。そして日本語が文のレベルだけでなく、複合語のレベルにおいても、ローマ字を受けいれやすい構造をしていることを示す、一つの例といえるのではなからうか。

おわりに

日本語はその文法構造と文字体系から、ローマ字表記語を含めた外国語を受けいれやすい。これは文のレベルだけでなく、複合語のレベルにおいてもいえることである。早くから日本語化して定着した外来語や、「型」「社」のようにローマ字の後にくる傾向の強い漢字の存在がその一因となっているといえよう。現代のように外国語との接触や技術革新にとまなう専門的な新語の一般化の盛んな時代において、これは好ましいことであると思う。しかし、ローマ字に表意性がないことによる言語不通の心配が、日本語の中でのローマ字の多用には常につきまとう。

ローマ字はすでに、平仮名、漢字、片仮名につぐ四つ目の文字として定着してきており、略語、記号といったレベルの用法だけでなく、ローマ字表記形態素として複合語の中にも根づいている。そして、外国語に由来しながら外来語といえない形態素も存在している。

日本語の中に符丁としかいえないような、意味不明のローマ字の形態素を含む複合語が増加することは問題である。だが、技術革新にとまなう新たな概念の表現の必要性からローマ字を含む複合語が増加することは、今後も十分予想されることである。

注

- ① 互換OS IBMと互換性のある基本ソフトウェア。
- ② 朝日新聞、日本経済新聞は宅配の朝刊大阪最終版である。
- ③ 森岡健二「外来語の条件」(『日本語学』1988年10月号、明治書院)および田辺洋二「外来語の略語」(同前)
- ④ AX協賛会 IBM「PC/AT」互換機に日本語対応機能をつけたパソコンを推進する団体。

薄膜EL 電場発光する薄膜。

VAN 付加価値通信網。

- BOT 「三 漢字から見た特徴」のテ参照。APEC アジア太平洋経済協力閣僚会議。
 BATAN インドネシア国家原子力庁。 C重油 硫黄分の多い重質の重油。
 VLCC 超大型タンカー。 PPS ポリフェニレンサンファイド。
 EDSジャパン 自動車などの技術計算を行う会社。 HDTV 高品位テレビ。
 BWR 沸騰水型軽水炉。 P7A 米国の対潜哨戒機。
 TPA ヒト組織プラスミノゲン活性化因子。米CBSレコード 米国のレコード会社。
 MIT マサチューセッツ工科大学。 DDS 薬物体内送達システム。
 JR 日本鉄道会社の略称。
- ⑤ CSCE 全欧州安全協力会議。
 ⑥ TNC ガット・ウルグアイラウンドの貿易交渉委員会。
 ⑦ WTO ワルシャワ条約機構。
 ⑧ CFE 欧州通常戦力交渉。
 ⑨ AMS 総合計量手段。
 ⑩ CD 譲渡性定期預金。
 ⑪ FF金利 米国連邦準備銀行の貸出し金利。
 ⑫ GNPデフレーター 総合的な物価指標。
 ⑬ M&A 企業の買収と合併。
 ⑭ ODA 政府開発援助。
 ⑮ TB 短期国債。
 ⑯ IC用ステッパー 光でIC回路を焼付ける装置。
 ⑰ 16Kグロブリン アレルゲン的一种。
 ⑱ LSIチップ 大規模集積回路の基板。

〔参考文献〕

- 1 『現代用語の基礎知識1990年版』（1990年1月、自由国民社）
- 2 『コンサイス外来語辞典第四版』（1987年4月、三省堂）
- 3 『日本語になった外国語辞典』（1983年7月、集英社）
- 4 『New International Fifth Edition ABBREVIATIONS DICTIONARY』（1978年 ELSEVIER）
- 5 広永周三郎「世界をつなぐローマ字語」（『言語』1985年9月号、大修館書店）
- 6 服部四郎『言語学の方法』（1960年12月、岩波書店）
- 7 日本語教育学会編『日本語教育辞典』（1982年5月、大修館書店）